

古代アジア世界の東と西 : 在ベルリン吐魯番文書
と正倉院文書の語るもの : その研究の歴史と一断
面

著者	小口 雅史
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	2
ページ	69-78
発行年	2005-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00022567

古代アジア世界の東と西：在ベルリン吐魯番文書と正倉院文書の語るもの

—その研究の歴史と一断面—

小 口 雅 史

はじめに

私は法政大学より在外研究の機会を与えられ、2002年9月より2003年9月までの1年有余の間、ドイツ連邦共和国ベルリンに滞在し、フンボルト大学の客員研究員として迎えられ、彼の地に長期滞在しなければならぬ、貴重な研究活動に従事することができた。その目的は日欧古代中世土地制度の比較史的研究¹⁾、ベルリン郊外に展開するスラブ人の堡塞集落 (Der slawische Burgwall) の研究²⁾、在独の日本研究の現状の調査³⁾ なども重要な柱であったが、主たる研究としてもっとも重きを置いたのは、なんとといっても在ベルリンの吐魯番文書コレクション (Turfan Sammlung) ⁴⁾ 中の、漢文による世俗文書の実態把握とその整理、内容検討であった。

在欧の漢文の吐魯番ないし敦煌文書のコレクションとしては、イギリスの大英図書館 (ロンドン) に保管されているスタインの将来文書 (Stein Collection) やフランスの国立図書館 (パリ) に収められているペリオの将来文書 (Fonds Pelliot Chinois) などがあまりに有名であるが、それに比して、在ベルリンの吐魯番文書コレクション (Turfan Sammlung)、とくに漢文世俗文書についてはあまり知られていない。私も比較研究のためにStein CollectionやFonds Pelliot Chinoisに含まれる漢文文書を閲覧すべくロンドンやパリに赴いたが、見慣れたベルリンのTurfan Sammlungのそれに比して、事前に知識としてはもっていたこととはいえ、あらためて実物に接すると、その見事さにはやはり圧倒された。研究者の関心がそちらに向いてしまっているのはまさに当然のことなのである。というのもベルリンのTurfan Sammlungに含まれる漢文世俗文書の大多数は、

小さな断片ばかりで、完全な古文書の形を保つものが多いStein CollectionやFonds Pelliot Chinois中の諸文書に比べればたしかに見劣りするのである。それゆえ数点の、それなりの大きさの古文書・典籍の類をのぞけば、世俗文書についての研究はさほど多くはない。それどころかその完全な目録化すら遅れているのが現状である。近年になって百濟康義氏や西脇常記氏らの長年の努力によって、ようやく本格的な目録が刊行され⁵⁾、その全貌がしだいに明らかになりつつある。ただ実物に即して詳細に検討すると、歴史学を専門とする立場からみて、それらの目録にはなお訂正ないし追加すべき点もあり、今後さらに継続して目録の整理を続ける必要があるように思われる⁶⁾。またかつては小さな断片について、それがいかなる典籍の一部であるかについては、担当者に職人的な該博な知識が求められたが、今や、中国の主要古典籍は、かなりのものが電子文献化されていて、数文字を頼りにその典籍名を割り出すことはかつてほど困難ではない。今後、漢文世俗文書についての詳細なカタログを整備していけば、研究が立ち後れている在ベルリンTurfan Sammlung中の典籍・古文書類の内容分析の進展も期待されると思う。

1 在ベルリンTurfan Sammlung中の漢文文書の伝来とその研究史

在ベルリンTurfan Sammlungは1902年から1914年にかけて4回にわたって実施されたドイツ（当時はプロイセン）隊によって将来されたものである。調査は考古学者・美術史家であったAlbert Grünwedelと、東洋学者であったAlbert von Le Coqに率いられて実施された⁷⁾。

ドイツ将来後の研究史（とくに漢文文書）については、これまでもいくつか論文化されていて⁸⁾、とくに西脇常記氏のものをもっとも詳しいので、詳細はそちらに譲る。またここでもそれに依拠して概略を祖述することとするが、ただ若干の訂正を要するところがあるので、そうした箇所を中心にふれながら、この機会に必要な応じて補訂を加えておくこととしたい。

在ベルリンTurfan Sammlung中の漢文文書は、経典その他の大きな文書をのぞけば、原則として2枚のガラス板に挟まれて、その四辺を黒い粘着テープで密封されて保管されている。原文書にはドイツ隊の調査時期や採集場所が明

記され、ガラス板には記述されている言語によって分類された番号を記したラベルが貼られている。こうしたガラス挟みの手法は日本の正倉院でも「玻璃装」と称して、明治以来、古裂・文書等、断片化しているものの整理法として一般的に通用している。その最大のメリットは、両面から見られること（ただし在ベルリンTurfan Sammlungでは紙が2重3重になっているものがあり、その場合は光に透かしても解読は容易ではない）であり、また古文書の扱いに慣れていない研究者が扱う場合でも、比較的リスクが小さいこともあって流行したのであるが、しかしガラスからのアルカリ（ソーダ）分の放出や、挟まれた中に汚れ・黴等が発生した場合のメンテナンスの難しさ、ガラス自体の危険性などが懸念され、無条件によいことばかりとはいえないともいわれている⁹⁾。もっともベルリンは日本とは異なり湿気についてはほとんど心配がない。またガラス板に挟んで立てて収納しているが、その集積度は高く、収蔵にあたってスペースの節約になることは確かである。

それらの文書については、ドイツへの将来直後からセンセーショナル的によくつかの研究が発表されたが、30,000点以上の断片からなるTurfan Sammlungの総体としての整理や研究調整のために、1912年、ベルリン科学アカデミー（Berliner Akademie der Wissenschaften）に東洋委員会（Orientalische Kommission）が設置された。またすべての発見物はベルリンの民族学博物館（Berliner Museum für Völkerkunde）¹⁰⁾のインド部門に保管されたが、1926年、テキスト類は切り離されてプロイセン科学アカデミー（Königlich-Preußische Akademie der Wissenschaften）へ移管されている。

第2次世界大戦中は、古文書類はドイツ各地に疎開されておおむね戦禍を免れた。ソ連占領下におかれた文書はベルリン・ドイツ科学アカデミー（Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin）¹¹⁾のもとでかつての東洋委員会を新たに再編した東洋学研究所（Institut für Orientforschung）で研究が続けられた。代表的な研究成果としてTürkische Turfan-Texteというシリーズが刊行されている¹²⁾。そしてそれを受けて刊行され始めた新シリーズが、Berliner Turfantexte というものである。1971年の第1集Fragmente der uigurischen Version des "Jin'gangjing mit den Gāthās des Meister Fu"に始まり、1985年の第15集Ein manichäisch-soghdisches ParabelbuchまではSchriften zur

Geschichte und Kultur des alten Orientsの一部として刊行され¹³⁾、1993年の第16集Die Mongolica der Berliner Turfansammlung以降、2000年の第20集Vimalakīrtinirdeśasūtra : Edition alttürkischer Übersetzungen nach Handschriftfragmenten von Berlin und KyotoまではBerliner Turfantexte単独のシリーズとなっている¹⁴⁾。一方西側に残されたものは、1970年代に、道路を挟んで向かい合うベルリン・フィルのホールとおそろいの外装で、瀟洒に新建築された西ベルリンの国立図書館 (Potsdamer Straße) に移管されている。

1990年の東西ドイツ統合にともなって、Turfan Sammlungも旧西ベルリンの国立図書館のもとに再統合されたわけであるが、それまでの整理・研究の状況を踏まえて、漢文文書とサンスクリット文書などを中心とする一群は旧西ベルリンの国立図書館 (Potsdamer Straße) のオリエント部 (Orientabteilung) に、ウイグル文などそれ以外の文書は旧東ドイツ科学アカデミー (1992年に再編されてBerlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften) のトルファン研究部門 (Turfanforschung) ¹⁵⁾ に保管されることとなった¹⁶⁾。

このTurfan Sammlungのうち、漢文文献は約6,000点と言われる。Chという整理番号が付せられたものの他、おもにウイグル文の文書 (U番号) の片面に漢文が記されたもの (Ch/U) などがあり、Ch番号のものなどはPotsdamer Straßeのベルリン国立図書館オリエント部の閲覧室でみることになるが、Ch/U番号のものは (ベルリン国立図書館オリエント部長¹⁷⁾ の許可を得た上で、ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーのトルファン研究部門に赴いて閲覧することになる。

Turfan Sammlung中の漢語断片は約6,000片と言われるが、その主体は仏典である。1960年代には旧ベルリン・ドイツ科学アカデミー (後の東ドイツ科学アカデミー) のトルファン研究部門に日本学のG.Schmidt博士、中国学のT.Thilo博士 (ドイツでは数少ない唐代研究者) ¹⁸⁾ が迎えられ、1967年以降、京都大学で敦煌写本の研究会を主催していた藤枝晃氏、あるいは龍谷大学西域研究会の竺沙雅章・井ノ口泰淳・古泉圓淳・京戸慈光・釈舎幸紀・上山大峻・宇野順治・百濟康義その他の各氏が、(とくに1973年までは日本との国交がないという困難な状況のなかで) 東ドイツを訪れて、漢訳仏典の目録作成が進められた。その貴重な成果が1975年のFujieda Akira; Schmitt,G; Thilo,T.; Inokuti Taijun, *Katalog chinesischer buddhistischer Textfragmente* (前記のBerliner Turfantexteの第6集に相当)、1985年

のThilo, T., *Katalog chinesischer buddhistischer Textfragmente Band 2* (Berliner Turfantexte第14集に相当)である。つづく目録第3巻も編集が進んでいるが、百濟康義氏の急逝もあって現時点では未刊である。

本文研究としては、東ドイツ科学アカデミー時代のAltorientalische Forschungenのシリーズに百濟康義氏らの研究があり¹⁹⁾、またMitteilungen des Instituts für OrientforschungのシリーズにはT. Thilo博士によるTurfan Sammlungを扱った研究がある²⁰⁾。ベルリンのTurfan Sammlungの中で漢文文献は、ドイツの伝統的な学問とは別な方向から取り組まなければならないという理由から、過去においてもっとも冷遇せられていた分野である²¹⁾。しかし本稿「はじめに」でも記したように漢文文献の目録もようやく整備されつつある。また断片であるが故に年代比定が困難であったが、このコレクションを管轄するベルリン国立図書館オリエント部長H.-O. Feistel博士の許可を得て、在フランクフルトの玉井達士氏がキール大学に依頼してAMS¹⁴C年代測定を実施している。今後の展開が期待される。また小口自身は、やはり断片であるが故に急務と思われる、その全文テキストデータベース化に取り組み始めている。最終的には電子目録にそれを組み込むことをめざしているところである。

2 日本古代史とトルファン文書

日本とトルファンとは、同じく唐の律令体制の影響を受けた東端と西端の国である。律令制が東西に同心円的に伝播していく過程で、唐から見た二つの「辺境」社会ではその受容にどのような違いがあるのか、逆にどのような類似点があるのか。比較史的にみてこれは大変興味深い問題である。

かつて6～8世紀のトルファン文書は、日本古代の木簡の年代を知るための書風の実例としても取り上げられたことがある²²⁾。その成果によれば、日本古代木簡の書体は、以前の通説であった「六朝風」というよりは隋の書風の影響を受けた可能性が高いという。

またTrufan Sammlung中の經典の中には、横の界線は普通の墨色だが、縦界を極薄の、あるかないかわからないような白い色の線で引いたものがあつた²³⁾。対して我が正倉院の聖語藏の經典類においても、一般に文書と経巻とを比較す

ると、経巻は界線の色が淡い傾向にあり、やはり時にあるかないか、といっ
 よいものもあるという²⁴⁾。本文の漆黒に対し、界線は淡い黒で、縦界と横界を
 比べると横界が相対的に黒、縦はグレイに近いようである。日本でいうグレイ
 の状態が、伝来状況・現在の保管状況によって白色に見えたのかもしれない。
 逆に、聖語蔵では白点・白書と呼び慣わしているものの中に、グレイの呈色の
 ものがあるとされる。Trufan Sammlungでもこの手の経巻はガラスに挟まれ
 ていないので直に調査ができるのであるが、たしかに角度をつけて見てみると
 縦界に光沢があって綺麗に光っていた。つまり日本とトルファンとで経巻の料
 紙などは一定の類似性がある。

また均田制関係文書・契約文書・売買文書についても日本との比較が可能で
 あるが、これらについては黒板勝美氏や仁井田陞氏らの先駆的研究があり、ま
 た戦前にはさらに数人の日本人学者がアカデミーをたずねて閲覧し、成果を公
 表している²⁵⁾。

さらに比較史的に興味深いのは正倉院戸籍・計帳との比較である。いまさら
 言うまでもなく、中国中原の王朝では秦漢以来、人間の登録主義が完徹してい
 る。その一方で、史籍を伝存するがゆえに、その編纂のための素材となった原
 史料は早くに湮滅するのが通例であって、これはちょうど日本とは逆の関係に
 ある。したがって籍帳類についても中国中原では、実物によらない間接的知見
 にとどまっていたのが、20世紀になって一気に始まった内陸アジアの考古学的
 調査によって籍帳類の実物が発見され、もって比較研究が可能になった。ただ
 欧州各地に分蔵されていることや、本稿でも触れてきたように必ずしも目録が
 完備していないことなどもあって、比較研究はまだ十分とは言えない。また現
 存するものは唐代のものが大半であって、5世紀のものはStein Collection中に
 1点、Turfan Sammlung中に1点²⁶⁾の計2点のみ。6世紀でもStein
 Collection中に1点あるのみであって、とくに日本の籍帳の起源を考える上では
 史料的に乏しい状況である。

それでも古くから両者の比較的研究はなされてきている。ここで取り上げ
 るのは、上記の5～6世紀のものとして数少ない残存戸籍である3点、すなわ
 ち①西涼建初12年(416)敦煌県籍(BL S113)・②北涼承陽2年(426)高寧
 県籍(SBB Ch6001v)、③西魏大統13年(547)瓜州効穀郡?籍?(計帳?)²⁷⁾

(BL S613背) と、④唐代の戸籍 (SBB Ch1034、Ch1212、Ch3810等) である。これらを日本の正倉院古代戸籍と比較する研究は、早く曾我部静雄氏によってなされている²⁸⁾。それによれば① (②) の特徴として家族数統計記載の存在が²⁹⁾、また③の特徴としては田土班給・公課記載の存在が挙げられるが、唐代になると (④)、田土班給記載のみとなり、公課記載が消滅するという (② ④は今回私がベルリンにて調査対象としたもので、曾我部氏の挙げた例ではないが特徴としては変わらない)。一方日本の正倉院戸籍の中には家族数統計記載を持つものがある。こうした書式・記載事項の変化から曾我部氏は、日本の古代戸籍が、唐代の戸籍ではなく、それ以前のものに似ていることを主張し、その淵源を唐以前にさかのぼらせ、またもって大化改新詔の造籍記事を事実と見るのである。大化改新詔については今は触れる余裕がないが、それは別としても、近年、日本古代の律令制を構成する様々な要素において、唐よりも古い時代の制度の流入が指摘されている。この戸籍の様式論もこうした近年の研究を踏まえて、なお追究すべき価値があるように思われる。

おわりに

以上、1年有余にわたるベルリンでの在外研究の成果の一端について、その後の整理・研究をふまえて触れさせていただいた。行論中にも記したとおり、在ベルリンのTurfan Sammlungはまだカタログすら完成していない状況で、その研究が他の類似コレクションに比して、かなり遅れている。しかしながらこれまで折に触れて記したように貴重なコレクションであることは間違いない。引き続き本文の電子化につとめ、またそれをもとに中国の電子テキストをも援用したカタログの整備を進めると共に、あらためて在独の研究者とも連絡を密にとりながら、本格的な研究を進めていくこととしたい。紙幅も尽きたのでとりあえずここで擱筆することとする。

(付記) 本稿は、2004年6月23日に行われた第17回法政大学国際日本学研究所月例研究会で報告したものを中心に、補訂したものである。なおベルリンにては本文中にも触れたベルリン国立図書館オリент部長のH.-O. Feistel氏、同氏への取り次ぎをお願いした同館Leiter der Abteilung überregionale Bibliographische DiensteのH. Waravens氏、また同館の書庫の案内や出納に従事して下さった司書のN. Fürtig女史、あるいは東アジ

ア部のH.Kitamura氏をはじめとして同館関係者各位に大変お世話になった。またベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーでの閲覧に際しては、P.Zieme氏やS.-Ch. Raschmann女史には格別の御配慮をいただいた。さらに渡独前・在独中ともに池田温先生や、菟百濟康義氏、西脇常記氏には種々ご教示いただき、また資料も提供していただいた。末尾ながら記して厚く謝意を表します。

註

- 1) フンボルト大学日本語・日本文化センター図書室の責任者 (Leiter) である Astrid Brochlos 女史は、東大寺領水無瀬荘を中心とした荘園などの日本の土地制度史の研究者で *Grundherrschaft in Japan. Entstehung und Struktur des Minase no shō*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag 2001, (Asien- und Afrika-Studien der Humboldt-Universität zu Berlin, Band 8) という単著がある。機会があればその邦訳を試みたい。また女史は最近、*Kanbun : Grundlagen der klassischen sino-japanischen Schriftsprache*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag 2004, (Asien- und Afrikastudien der Humboldt-Universität zu Berlin, Band 16) という著書も公刊している。
- 2) その時代は10世紀とされ、ちょうど日本では北緯40度以北の地域で環壕をめぐらした「防御性集落」が展開した時代に相当する。Der Burgwall in Berlin-Spandau をめぐる一連の研究が有名。ベルリン郊外の堡塞集落の最新の発掘研究成果としては、M.Ullrich, *Slawenburg Raddusch*, Wünsdorf: BLDAL 2003 がある。日本の防御性集落については拙稿「古代北日本の「防御性集落」」(『歴史評論』657、2005) 他参照。
- 3) 例えばフンボルト大学日本語・日本文化センターおよび附属の森鷗外記念館より定期的に刊行されている *Japonica Humboldtiana* や *Izumi* 叢書シリーズ (いずれも Harrassowitz Verlag 刊) など参照。主任教授の K.Kracht 氏らによる一連の研究が掲載されている。
- 4) 言語的にはおよそ25種の文字による15~17ほどの言語で書かれた典籍・文書を含むと言われている。
- 5) 百濟康義編『ベルリン所蔵東トルキスタン出土漢文文献総目録 (試行本)』(西域研究会、2000)、Nisiwaki Tsuneki, *Chinesische und Manjurische Handschriften und Seltene Drucke III Chinesische Texte Vermischten Inhalts aus der Berliner Turfansammlung*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag 2001。ただ百濟康義「マインツ資料目録-旧西ベルリン所蔵中央アジア出土漢文仏典資料-」(『龍谷紀要』21-1、1999)に記されているような事情によって、両者の研究協力がなされないまま、百濟氏のご逝去されたことは実に残念なことである。なお中国では榮新江氏による目録化がなされている。「德国「吐魯番取集品」中の漢文典籍與文書」(『華学』3、1998)。
- 6) とりあえず私が編集した電子的な暫定目録 (CDR版) として、Masashi Oguchi : *Katalog chinesischer weltlicher Textfragmente der Berliner Turfan-Sammlung*, 2004 参照。先行目録を訂正した箇所は、色付文字で表示されるようになっている。たとえば西脇氏の目録での recto と verso の別については今後なお検討の余地があるように思う。
- 7) M.Yaldiz, *Archäologie und Kunstgeschichte Chinesisch-Zentralasiens*, Leiden: E.J.Brill 1987 他参照。
- 8) トマス・ティロ (藤枝晃記)「ドイツ民主共和国科学アカデミーにおける古代東洋研究の現況」(『東方学』46、1973)、西脇常記「ドイツのトルファンコレクション (上) (下) -ベルリン国立図書館所蔵のトルファン漢語文書-」(『月刊百科』389,391、1995)、同『ベルリン・トルファン・コレクション漢語文書研究』(京都

大総合人間学部西脇研究室、1997)、同『ドイツ将来のトルファン漢語文書』(京都大学学術出版会、2002)、シモーネ・クリスティアーネ・ラッシュマン(西脇常記訳)「ベルリン所有のトルファン資料に関する研究概観」(『月刊百科』391、1995)、榮新江『海外敦煌吐魯番文獻知見録』(江西人民出版社、1996)、森安孝夫「欧州所在中央アジア出土文書・遺品の調査と研究」(『東方学』99、2000)など。なお私のベルリン赴任直後に、ちょうどベルリンでTurufan revisitedという国際シンポジウムが開催され(私が渡独した2002年という年は、ドイツ隊の第1回探検以来100年という記念すべき年にあたる)、また日本への帰任直後には、それへの返礼の意を込めて、龍谷大学にて国際シンポジウム「佛の来た道2003」が開催され、共に参加することができた。また前者についてはその全貌が*Turfan revisited: the first century of research into the arts and cultures of the Silk Road*, Berlin: Dietrich Reimer 2004 (Monographien zur indischen Archäologie, Kunst und Philologie, Bd.17)という形で公開されている。

- 9) 宮内庁正倉院事務所の杉本一樹氏のご教示による。現実にはベルリンのガラス板も、とくに粘着テープ部を中心に一部破損が目立ち、またガラス面には指紋もかなり付着している。なお大英図書館で閲覧したStein Collectionの古文書類(とくに断片的なもの)では、ガラスではなくてビニール状のもので数点を1枚の台紙にパックして、古文書の外の縁に沿ってそのビニールを縫いつけるというスタイルのものが目立った。
- 10) またはVölkerkundemuseumとも。西脇註8)前掲『ドイツ将来のトルファン漢語文書』で「ベルリン民族学博物館」「ベルリン民俗博物館」「人類学博物館」などとみえるものがこれにあたる。
- 11) 1972年以降はAkademie der Wissenschaften der DDR。
- 12) 西脇註8)前掲『ドイツ将来のトルファン漢語文書』の紹介(p17,31等)では誤植・脱漏がある。このシリーズは、1929年から刊行が始まり、1936年に第7集が出版された後しばらく中断し、1958年までに第8~10集が刊行された。
- 13) ただしSchriften zur Geschichte und Kultur des alten Orientsの中での通し番号を付せられたのは1973年のBerliner Turfantexte第4集までで(Schriften zur Geschichte und Kultur des alten Orientsの第8集に相当)、以後は、シリーズ内での通し番号は付せられていない。
- 14) 西脇註8)前掲『ドイツ将来のトルファン漢語文書』の紹介(p18,31)を一部補訂した。
- 15) 当初は旧東ベルリンのUnter den Lindenのフンボルト大学に隣接したアカデミーの分室にあったが、2000年の秋からUnter den Lindenを隔てるJägerstraßeのアカデミー内に移転した。
- 16) ベルリン国立図書館もベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーも、ともに内務省管轄のプロイセン文化財団(Preußischer Kulturbesitz)の下にある。なお国立図書館のTurfan Sammlungの簡単な概説として、T.Schmieder-Jappe, *Die Sammlung der orientalischen Handschriften der Staatsbibliothek zu Berlin: Geschichte, Bestandsstruktur und aufgabenorientierte Bedeutung im nationalen Rahmen*, Berlin: Logos 2004が刊行された。
- 17) 西脇常記氏は随所でLeiter der Orientabteilungを「アジア部長」と訳しているが、ベルリン国立図書館の部構成からみて誤解を生じかねないので、本稿では「オリエント部長」と訳しておく。
- 18) 著書として*Chang'an: Metropole Ostasiens und Weltstadt des Mittelalters*, Wiesbaden: Harrassowitz, 1997等がある。
- 19) Turfan Sammlungを用いたものではないが、T.Thilo博士の唐代史研究成果としてたとえば第17集(1990)には*Volksmassen, Unruhen und die öffentliche Ordnung in der Tang-Hauptstadt Chang'an*がある。

- 20) たとえば第14集2巻（1968）には、*Fragmente chinesischer Haushaltsregister aus Dunhuang in der Berliner Turfan-Sammlung*が、第16集1巻（1970）には、*Fragmente chinesischer Haushaltsregister der Tang-Zeit in der Berliner Turfan-Sammlung*がある。ちなみにこのシリーズには日本古代史に関わるものとして、第1集1巻（1953）にI.-L. Klug: *Fujiwara Morosuke und seine, Hinterlassene Lehre*“が、また第4集3巻（1956）にF. Mossner: *Zur Etimologie der Ausdrücke Sai-nokawara und Shōzuka-no-baba*がある。なお西脇註9)前掲『ドイツ将来のトルファン漢語文書』の記述（p31）の誤植を正した。
- 21) もっともドイツでも、Jörg-Michael Scheil氏が、*Chinesische Darlehensverträge aus Turfan-Funden : ein Beitrag zur Geschichte des chinesischen Privatrechts*, Göttingen: Muster-Schmidt 1992、あるいは*Die chinesischen Vertragsurkunden aus Turfan*, Stuttgart : Steiner 1995といった著書を刊行している。
- 22) 鬼頭清明「在欧トルファン文書の調査－昭和五十五年度文部省在外研究員東独在外研修報告－」（『文化庁月報』150、1981年）。
- 23) たとえばCh5546など。註5) 前掲の西脇目録ではKeine Gitterlinienと記しているほどである。
- 24) 杉本一樹氏のご教示による。
- 25) 仁井田陸『唐宋法律文書の研究』（東京大学出版会、1937年）他。
- 26) Ch6001vの承陽2年（426）戸籍。この文書は1980年代初めにソ連からライプツィヒ民族学博物館（Museum für Völkerkunde zu Leipzig）に返還された文書群に含まれていたもので西脇註8) 前掲『ベルリン・トルファン・コレクション漢語文書研究』によってその存在が学界に紹介されたが、關尾史郎「『承陽』備忘－『吐魯番出土文書』簡記再補－」（『東洋史苑』50・51、1998）によって、年代が確定した。
- 27) 池田温『中国古代籍帳研究 概観・録文』（東京大学出版会、1979）ではこれを戸籍ではなく計帳とする。この問題についての詳しい研究史整理もなされているので参照されたい。
- 28) 曾我部静雄「西涼及び両魏の戸籍と我が古代戸籍との関係－附、課役問題の現状」（『法制史研究』7、1957年。後に同『律令を中心とした日中関係史の研究』再録）。
- 29) ②については註26) で触れたとおりであるが、実物に即してみると、紙の断片の上部に残存する墨痕は、居所・戸主名・年齢の末尾である可能性が高く、①と同様の様式であったとみてよい。私の帰国直後、關尾史郎氏よりの私信により、氏がベルリン国立図書館を訪れ、墨痕だけを確認しに行ったとのことであった。おそらく氏も私見と同様であると思われる。また本稿に関わる発表をした月例研究会の席上、嵐義人氏からもこの点についてご教示を得た。